

通し番号	
------	--

分類番号	15・54・22・12
------	-------------

(成果情報名) フェストロリウム(エバーグリーン)の耕作放棄地での適応性	
[要約] 省力栽培技術に適応した永年牧草として最も可能性が認められたフェストロリウムについて、ホルスタイン種育成牛の放牧による草地管理を行い、耕作放棄地での省力栽培技術の適応性について検討した。2月下旬に播種したフェストロリウム草地に7月及び9月に時間制限放牧を実施した結果、草地は7月にはフェストロリウムが最優占種であったが、9月にはエノコログサが最優占種となり、フェストロリウムの優占度は、メヒシバに次いで3位となっていた。フェストロリウムは、寒地型牧草であり、神奈川県での越夏は難しく、耕作放棄地での省力栽培に適応した草種とはならなかった。	
(実施機関名・部名) 神奈川県畜産研究所 畜産工学部	連絡先 046-238-4056

[背景・ねらい]

自給飼料生産拡大の一環として、都市近郊における耕作放棄地の有効利用が重要となっている。そこで、永年牧草を主体とした耕作放棄地での省力粗飼料生産技術の開発のため、省力栽培技術に適応した永年牧草の品種を選定おこなったが、供試したすべての草種で農閑期の刈取のみでは草地の造成・維持はできなかった。そこで、省力栽培技術に適応した永年牧草として最も可能性が認められたフェストロリウムについて、ホルスタイン種育成牛の放牧による草地管理を行い、耕作放棄地での省力栽培技術の適応性について検討した。

[成果の内容・特徴]

- 1 放牧は、ホルスタイン種育成牛を午後3時から午前9時までの時間制限放牧を実施した。放牧日数は、26日間であった。(表1)
- 2 放牧前の植生調査では、草地ではフェストロリウムが積算優占度が85.8であり最優占種であったが、9月にはエノコログサ、メヒシバの優占度が大きくなり、フェストロリウムの積算優占度が40.5と半分以下に減少し、優先順位はエノコログサ、メヒシバに次いで3位となった。
- 3 フェストロリウムの乾物収量は、7月には全体の約70%を占めたが、9月には全体の約5%程度でしかなかった。(表2)

[成果の活用面・留意点]

フェストロリウム(エバーグリーン)は、冠さび病抵抗性や耐暑性の面から、永年牧草として本県での栽培には適さず、耕作放棄地での省力栽培に用いる草種としては、適当ではないと考えられた。

[具体的データ]

表1 放牧日数

放牧期間	放牧日数
7月15日～7月28日	11日
9月4日～10月1日	15日

注) 放牧日数は、期間中放牧を実施した日数である

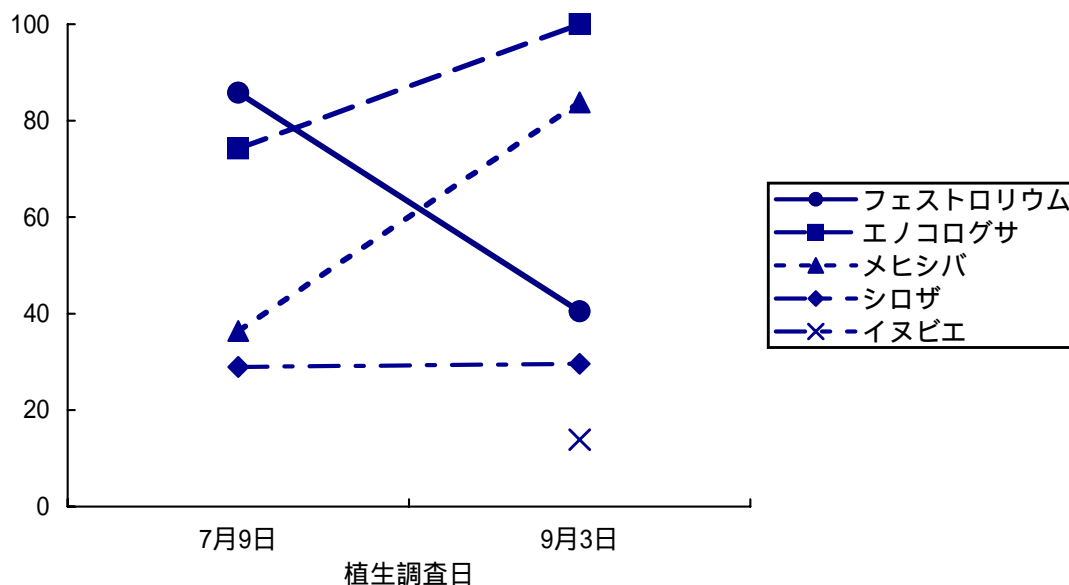


図1 草地植生の核酸積算優占度による推移

表2 収量調査結果

調査日	7月9日			9月3日		
	生草収量	乾物率	乾物収量	生草収量	乾物率	乾物収量
フェストロリウム	161.18	16.48	27.58	10.14	23.70	2.72
エノコログサ	40.12	18.02	7.30	97.98	22.33	22.18
メヒシバ	18.36	9.33	2.84	80.68	20.02	17.32
シロザ	5.20	12.44	1.16	6.94	16.92	1.84
イヌビエ				1.84	4.35	0.40
合計	224.86		38.88	197.58		44.46

注) 生草収量及び乾物収量はそれぞれkg/aで示した。
乾物率は%で示した。

[資料名] 平成 15 年度試験研究成績書 (繁殖工学・乳牛・肉牛・飼料作物)

[研究課題名] 耕作放棄地での省力栽培に適した飼料作物栽培体系の確立

永年牧草を用いた省力栽培技術に適応した品種の選定

[研究期間] 平成 13～15 年度

[研究者担当名] 折原健太郎・秋山 清・水宅清二・平原敏史